

幕外花開二月風

二月の風

臺前淚滴千行竹

うてなの前に涙垂る千すぢの竹よ

夢心與妾腸

琴の心とわがあもひ

此夜断續續

この夜断えはた統へ

想雲白馬懸雕弓

弓をたはさみ白き馬はしらす想のみすがたに

月間向處無毒風

いづれのくにの女に春風のそよびやうんや

山川未此時鎌石臼

君のばは石のじく鎌むにあらず

春顏不久如花紅

われのかたちは花の紅久しくもたず

夜殘高碧海河河

夜のほどろ碧のそくに横たはる天の河

河上黑深空白波

河にはかかる橋もなくいたづらに沖津白波

西風未起悲龍吟

西風まだ吹きこさず悲し機の枝

年年織素撫雙蛾

年々に白絹織りて双の眉いよよひそみぬ

江山迢遙無休絕

江と山とはろはるとして絶えなくに

淚眼看燈乍明滅

涙ぐみ見る目のまへに灯火のふと明りはた消えめ

自從孤館深鎖寒

ひとり館にたれこみて窓鎖ししより

桂行幾度圓還缺

月の桂のいくたびか満ちて缺けだる

鶯鶯向曉鶯森木

あゝあゝと鶯は曉を森に鳴き

風過池塘書畫玉  
田日尋夢不成  
橋南更問仙人ト

風過ぎて 池の堤に やややと 畫 ひびく  
ひるの日かけも しらじらと 夢むすばせす  
橋のたもの 黒者に 若かへる田と またも問はむか 5233(2087)

「有所思」は外集に收め、方世拳は、賀の作ではあるまい、という。それならば問題にはならないが、「夷中思」けまきれもない賀の作であろう。

× 「有所思」は、たしかに平滑で、賀の他の作とは書きモノとなるようである。たなじは、拙稿「三長吉」の中でわたくしが「長吉B」とよんだ人の作でもあらうか。

ところで、断と続とを直接むすんでいはないが、間接に結んでその意義を深化した作がある。「長歌續短歌」である。

|       |         |         |       |
|-------|---------|---------|-------|
| 長歌破衣襟 | ああ      | 長歌      | 衣襟を破り |
| 短歌斷白髮 | また      | 短歌      | 白髮を断つ |
| 秦王不可見 | 秦王は     | 見人すべもなく |       |
| 旦夕成内熱 | あやタに    | むらぎも燃えぬ |       |
| 渴飲壺中酒 | 渴きては    | 壺の酒くみ   |       |
| 飢拔隣頭粟 | 隣の索くみ抜く |         |       |

淒淒四月關  
千里一時綠  
夜峯何離離  
明月落石底  
能徊沿石尋  
照出高峯外  
不得與之遊  
歌成鬢先改

やぶしらに 四月は 開けて  
地は なべて 緑となりぬ  
おどるなる 夜の峯は や  
月しづか 石底に 落つ  
石に 沿ひ さまよひ たづね  
ふと見るに あかる 高峯や  
このきみと 遊ぶあたはす  
歌なりて 鬢 まづ かはる

2101(20745, 01140)

この詩については、拙稿「長歌續短歌」にやや詳しく述べた。大筋においては、おのれがよ  
いだらう。太宗とかかわるだらうことに、そのとき、廻り及ばなかつた。

さて題の「長歌續短歌」。長歌と短歌はなぜ接続するのか。衣襟がぼくぼくに破れ白髪がきれ  
ぎれに断たれたからだ。なぜ衣が破れ髪が断れたのか。秦王を脱ぬことができないからである。  
詩人と秦王との連絡が、詩人の日常に破衣襟と断白髪の結合をもたらし、衣襟と白髪の破断が、  
長歌と短歌を接続するのである。

長歌と短歌を接続して、それでは詩人は、何をしたうのか。飲むほどに渴く腹中渇、食うほど  
に飢える腹中渉、生命の裏に渇々をしかもたらず、ぬ四月……されば、なけ衣襟と白髪のみでな

く、人間も季節も風景も山陸も月も、變するに時間も空間も、すべて宇宙は断片となり、各断片は互いに何のかかわりもなく、ちぐはぐに漆黒離離として、文明の崩壊した世界である。

では、「これと遊ぼう」として見る「こと」のできない秦王とは、誰か。王注は唐の天子といい、姚注は憲宗だと限定する。李賀は憲宗朝の官吏には違いないが、史官ではなく、かれの詩に事實の記録でけたない。秦王を憲宗と限定することは当然めだろう。唐の天子と拡大してもなお、詩中の秦王が幻示するものの一分にすぎまい。しかしながらかれの詩が、まったくの仮空に建築された夢でないことは、これまでにもたびたびのべた。かれの詩が事實と断続する境目での秦王を熟視すれば、憲宗とみることも、唐の天子とみることも、誤りではない。さうに有力なものとして太宗をあてることができるだろう。太宗はげんに、天子の位につく前には秦王であった。

李賀の祖先の李神通が、太宗と結び太宗を支持したのは、太宗が秦王だった時である。この時、秦王もまた神通を礼遇し優遇した。秦王が天子となつたとき、この天子のますなしたことは、神通を表には敬して裏に遠ざけたことである。もはやかつての秦王は、神通には見るべからざるものとなつた。

李神通の子の李孝逸は、賀の四せの祖である。孝逸もまたもとより唐の皇族でありながら、則天武后的臣となり、唐室復興の名臣として重を起した徐敬業を討とすると決断したとき、則天の知遇に対する感激が最も大きかつただろが、一面、唐の皇帝に対して「誰かよ／＼眞珠を奉として、外して珍雞の泣べを飛かんや」<sup>（あすき）</sup>といった感情もあったに違いない。

太宗の晩年の妻であった武后は、その権謀術数においてほとんどすべてを太宗に学び太宗を模倣した。武后は季送を存分に駆使したのち放逐した。(拙稿「桜伽」参照)

賀の父の李晉肅は陝州の令となつたとき邵伯祠を改修した。邵伯は周の召公で、成王時代に周の國を陝を境に二分し、東を周公が、西を召公があさめた。ところで太子建成と秦王世民との間が険悪になつたとき、高祖は世民に「陝州以東はお前の管轄にする。長安を去り、イ洛陽にゆけ」といふた。秦王に「周公」となれといつたことになる。晉肅はなぜ周公ではない召公の祠を改修したか。(拙稿「晉肅」参照)

太宗に「二名不偏譲令」という文章がある。中國では人の実名をいつことは失礼とされた。二の失礼を避けるために字など用いられる。ただ名が二字の場合には一字だけ避ければよいとされるが、それが一般には二字ともに避ける風潮であった。太宗の場合、その名は世民であり、天子であるから、唐の支配下の入はるの中でも文書の中でも、世の字も民の字も一切使用できない。けなはだ不便だが不敬のそしりを免れるためには忍ばねばならなかつた。太宗の「二名不偏譲令」はそれを古来の人に従つて一字だけ避けよいと示したものである。

ところが李賀は、進士の試験を受けるとしたとき、進士の進と賀の父の名晉肅の音と義同じであるから、賀が進士の試験を受けることは父の譲を犯すことになる、といつて阻まれた。太宗の約束した二名不偏<sup>譲</sup>からいつて、賀には何の咎めらざるべき理由もないが、その約束に従つたところに賀の最初の、決定的な、挫折があった。このとき、賀のもつとも会いたかったのは太宗

であつただろうが、見る「こと」はできなかつた。書注がひゞ『戰國策』の語に「王の見るを得難き、「こと天帝の如し」というのがある。唐朝においては太宗はまさに天帝の「こと」であった。李賀の生きた代において、表に尊崇しながら人々がものはや無視していた点においても、また。

太宗の詩の「韋編斷仍統」には、滅びようとした文化の伝統をおれが継承したのだ、といふ自信がみえる。だが、累して竇圉・厚篆が示したであらう夷・舜の代の文化の伝統が太宗によつて続いたであらうか。「繰帙詩圖卷」右壁の教化を聞くべく繰帙をべりひびげはしたであらうが、やがてまた巻くのである。太宗は先已既が見めいた者の中公の本職とほとんど同じものをその本職とした。筆者ではあつても、王者といふべき人ではない。

『淮南子』で、される方に力をこめて用いられた「断続」を、太宗はその代表作においては続く方に力をこめて王者を誇張した。李賀はその「こと」をふまえた上で、太宗の伝統継承が仮装にすぎない「こと」を歌つたのだ。それは、「長歌統韻歌」においてだけではない。かれの後半朝の作品はほとんどすべく、なにがしかその要素をもつ。「漢唐姬飲酒歌」5240(2083)の「勧めて天帝へ來つて訴えよ」の「こと」はその最もいじりこむところである。たゞして「贈陳商」の、

長安育男子

長安に男子ありけり

二十弋己朽

としあたちばはや朽つ

桺加堆葉前

桺加経机にうづだかく

楚辭繫肘後  
人生有窮惟  
日暮聊飲酒  
祇今道已曠

何必須山當  
老かる田を何とて待たむ

(一)、既に五十に近づいた天子太宗がおのぞの聖徳を中外に示すために「帝京篇」を、二十歳の青年詩人がその盡無徳意によつてへつがえす作といえないか。

3141(20785)

六

書の大皇は手づから中景を定めたり。しがれども詩語は殊に丈夫の氣なし。體氣のくせしむるなり。「賦を雪」いで西王に酬い、免を除いて千古に報ず」「首に匹馬に乘、て去りしが、今や万乗を駕せて來たる」は、やや入處を強うす。然れどもこれ意ありての作。帝京篇は可なるのみ。余のものは花草點綴を免れず。遠くは漢武に因り、近くは曹公に倣る。

明の王世貞が『全唐詩説』に説く太宗の詩の批評である。「文皇帝」に太宗の諱、「頤躬」の句には眞觀二十年、太宗が靈州に行幸し、石碑に刻ませた詩の断片、「皆乘」に河中府迺寧縣に題した句、「有美之作」とは政治的な意図があつての作と「うほどの意であろう。漢式に漢の武帝・曹操は魏の曹操。

この批評は正確で、詩人としての太宰は、漢武や曹操の足もとにこ及ぶまい。やうして、詩においては時代の風潮を新たに切りひらく英雄ではなく、前代からの詩の範の中でのことわざをつくる小才のきいた人を出ないだろう。

太宗はかつて艶体の詩を作り、虞世南に唱和を求めた。世南は「お作はたくみではあるが雅正ではない、上の好むところは下がならず甚し」と申します。この詩が伝つて天下に風靡することを恐れますので、唱和いたしかねます」と一一とわった。「君を試してみただけだ」太宗はこういって世間に帛五十匹あたえた。『新唐書』の伝にこんな話を記す。その時の作らしいものがいま残つていないと一二からして、太宗は、おのれの作品であつても帝王にふさわしくないと思われるものは慎重に抹殺した、だらうと察せられる。また反面、現存作品にも、側近の手がけいつていると考へねばならぬ。この点で口、唐人の作品に一般に当てはまるところで、かれらの作を嚴密には個人の作とはしない場合が多い。しかし、後代の人々が天子個人の作と考え、それに反応する

太宗の詩はすぐれたものではない。ではまた平凡かといえば、そうでもない。

絶落葉被架  
花残菊破叢  
絶落ちて藤は茶を被き  
花残えて菊は葉を破る

過田也

(81000)

水花翻照樹  
堤蘭倒掉波  
水花 翻って 樹を照し  
堤蘭 倒れて 波を掉す

臨洛水

(00029)

のようすに、科学者、あるいは実業家で物を綿密に見る人の目がどうえた描寫があり、「霜濃漫広  
隈」冬日「仙氣凝三嶺」春日「潔野凝晨暉」秋日「凝曉起麗城」月晦「秋光凝翠靄」秋日  
微言「雲凝愁半嶺」秋日「露凝千片玉」同「寒野凝朝霧」冬日「疏興明池」春日「素晝曉凝華」春日「帶  
岫凝全碧」夏日「碧雲凝露」夏日「凝露浮光」春日「陰蘭凝霜」秋日「凝霜凝高掌」秋日「曉光  
「萬漫陰於暮年」秋日風のように凝字に対する偏執があり、一々例をあげることなくが、斜の  
字や仄律に対する愛好がある。「醉翠」「碎紅」のように本来は色彩語と結びつかぬ「ノハモ」を題  
いて結んで一種のアーチカルメを結果している。

「ノハモ」は前代、同時の詩人に一般的な傾向ではない。太宗以後にノハモの一部を詠歌する者は  
ないではないが、李賀の詩にはすべてをそなえる。

敬視的凝視が質の詩法の有力な一特色であることは拙稿「石破天驚廻秋雨」でのべた。質による  
の作品に「凝」字を十六回、「斜」字を十七回、使用する。質よりはるかに作品の多い李白に凝

字九回、斜字七回、韓愈に楷字十四回、斜字六回しか使用されていないことを参考にすれば、算におけるいはこれらの文字を故意に複用するのかどうか疑われる。仄律に「いて口すでにたびたび触れているので省略する。色彩語については石川一成・荒井健の二氏に論があってわたくしがここで指摘する様態の語も例にあげている。他に用意した語例も繁瑣を避けてすべて省く。

太宗の特異な語法は王世貞のいわゆる「花草點綴」の作に多く見出される。太宗の語法をひきついだ李賀の作もまた「薔薇花草蜂蝶の間に属するもの」<sup>「薔薇花草蜂蝶の間に属するもの」</sup>と批評されることは正に奇遇というべきだろう。だがここでも頃の語法は、太宗との類似の中で、太宗の遺図をくつがえす方向に使用されているように感ぜられる。

新豊停驛車　新豊に驛車を停め

謙邑駢鳴笳

謙邑に鳴笳を駢む

國荒一徑斷

國荒れて一徑断え

並古半階斜

並古りて半階斜なり

前池消舊水

前池に旧水消え

苦樹發今花

苦樹に今花發す

一朝辭此地

一朝この地を辞し

四海廢爲家

四海ついに家となれり

太宗　極落也

断、であろうが斜、であろうが、すべては幸福な終末に收束されねばならぬ。「撥亂反正」が王

者に対する要請であり、要請したぐらで詩語は人形の上に範囲をかく、人

四三  
二八

春月夜啼鶴  
宮簾隔御花  
雲生朱絰暗  
石断繁錢斜  
玉梳盛殘露  
銀燈點葛紗  
蜀王無近信  
泉上有行牙

春の月夜を啼く鶴  
簾は御苑の花へだて  
雲いでて朱の理珞アラタマ小を暗きに  
石は大き緊の昔ななめなり  
玉の梳に残んの露はしたたりて  
古りし紗のとばりに銀の灯カヒぞ點る  
一一のひだら蜀王のたよりもなくて  
泉のほとり井の芽の角ぐめるかな

1010 (20654)

「第六第五・六句」は、太宗「過西山」第二首の「絢落藤披花、花殘菊破叢」に彷彿し、第二句は「雙城望月」(00022)の「隔樹花如綵」に酷似する。

華清宮は陝西省臨潼県の驪山にあり、ここに源く温泉に因んで秦の始皇帝が御湯を築き、漢の武帝が改修し、唐の太宗が再興し、高宗が温泉町と名づけ、玄宗が拡大して華清宮と改名したといわれる。太宗は貞觀四年以後しばしばここに行幸している。曾益注は「貞觀十八年（六四四）唐の太宗が廻いた」と一つ。それならば凌煙閣を築いて功臣の肖像を描かせた次の年である。

詩中の「蜀王」を註は玄宗と見、姚注は太宗の第六子で蜀王となつた李愔とみる。太宗にどつては惜みのたねの無賴の子であつた。蕭何注は、李愔を「一にもつてへるのは当らない」といふが、どうともいえめ。しかし、この時では特きのたれかをあつより、太宗も李愔も玄宗もふくめたものを「蜀王」といつたのではないか。

それよりも太宗の「海西」を、李賀が「海闊清曉」「でうらがえし、太宗が「一朝辞此地、四海寧矣」「ハリハ」を吹いたといふを、賀が「蜀王無近信、海上有牙牙」とさりげなくいなしてこひとひに、四をとめておけばよいのである。

(昭和辛亥七月十八日一九月二日)

▲ 杂丛 (雜叢) · 1 ▲ 唐高祖 遣淮王神璡屯撫山東詔 敬定金匱文卷一

隋德下衰政荒民散九州幅裂四海瓜分元元無事困豺狼之吻憤犧野首結兵革之烽屢起竇圖故其危墜一物失所情深納諭今趙魏之人俱承大化海岱之境肅肅朝章然而尚遁迹戎殘苟凶累經途邇阻末繇自達臺風布教必倚循東梁服招搖事貞明忠古翊衛大將軍上在國淮王神璡也惟近嘗功參輔佐節建旗冗營重寄可山東遂安撫大使其山東諸軍事並受節度

▲ 杂丛 (雜叢) · 2 ▲ 唐太宗 二名不偏諱令 画 第四

伏禮二名不偏諱父達體非無前哲近世以來曲爲節制兩字兼避廢體已多率意而行有違經語今宜依

據禮典務從簡約仰效先哲垂法將來其官號人名及公私文籍有世及民兩字不連譜者並不須避

△ 从・3 ▼ 唐太宗 加淮安王神通燕郡王藝開府儀同三司詔 同 卷四

褒獎賜爵國章典厚秩清階式隆朝望左武衛大將軍上柱國淮安王神通宗室之長德品優宏綸搆之初  
早樹勳績右武衛大將軍上柱國燕郡王藝夙著勳志懷強毅久司戎禁見稱貞確宣加榮寵式允具瞻並可  
問奇儀同三司 初字の下の空格はわたしの誤写。从・3の第六行行末の空格も。

△ 从・4 ▼ 闕名 天寶告衛將軍贈左武衛大將軍代州都督柱國淄川公李育君碑 同 九九二

聞夫上圖列緯極疆分帝室之尊下奠兼山大岳峙天孫之鎮欽惟昌運兩儀以相成事本枝三十世昌坤  
之業<sup>昌</sup><sup>岐</sup><sup>之</sup><sup>昌</sup><sup>清</sup>廟武光列將譽重柝於巖廊寵懋親賢在於淄川公矣公譜孝同高祖太武皇帝之父子太  
宗文皇帝之從祖弟也高惟流雲降祉惟德光於動靜御氣騰真至道光於天地元功濫運貽寶祚於千齡富德  
昭昇撫翰在於三十九皇而統極一六合以爲家是以<sup>璫</sup><sup>雲</sup>扶苦而交禡<sup>珠</sup>源蕩日掩河漢以分流比  
夫黃神搖<sup>通</sup>圖傳姓止乎任始丹書受命錫允<sup>也</sup>乎應韓固不可同年而語矣曾祖太祖景皇帝沈迹栖神謠龍  
田以雲霞飛英演化應賛谷以魁騰八柱之載載宣萬古之心<sup>也</sup>係同夫后授<sup>重</sup>臺命於岐<sup>昌</sup>取靈<sup>舊</sup>陽<sup>造</sup>基  
深北海以開矣父光祿大夫宗正卿左領節督<sup>古</sup>衛大將軍山東道行臺尚書左僕射<sup>右衛</sup>大將軍元<sup>武</sup>軍將開  
府儀同三司上柱國贈司空淮安靖王藝孫構之初材高八子會經綸之肇寄重<sup>三</sup>南顧寥廓而上征凌姑<sup>餘</sup>而  
獨運擬漢室發元推轂以並驅方波<sup>魏</sup>朝任城望塵而後殿故能入光上鼓出憲元戎<sup>華</sup>齊服其羽儀列藩輶  
其標汗公之憂朱邸憑光紫漢羊車在馭先據拔萃之姿獸艦<sup>登</sup>獨擅生知之敏<sup>明</sup>斯<sup>也</sup>自開明月之珍類

彼天河一航浮雲之駿馬墮網(兜而羣凶)競逐五鎗翼盧因郊多墨高祖併清坤軸載握乾符電發參墟則六軍  
西引風驅秦甸則五繪東(蹠)靖王夙贊精(氏)遷(唐鄂杜)縣(隸)南國首應壽圖公親奉旄麾(參)領太宗時爲秦  
公總兵長安之右及進圍(國)秦邑公即轍焉公當承間啓靖王曰秦公聽視非常功業又大雖非儲嗣心竊留歷  
靖王心然之因令委轂(官)秦府初爲庫員(史)特蒙寵渥高祖踐祚授柱國武鄉縣開國公邑一千户於(元)時兩戰  
干戈實匱靡艱乃於近閭別開學館賢戚子弟擇方(異)者(升)之公以夙成(特膺)俊選蒙衆已導(臨)白渠而載遼  
築(宮)初基踐(山)以增峻武德五載封淄川郡王邑五千戶督府荆燕初襲中陽之命降班齊趙旋建武之封  
九年徙爵爲(公)從朝典也太宗御極授左千牛備身執戟匪疲是託寸苗之比處錐方挺聯因尺木之階亦由瑞  
騎行騁超丹山而儀紫闕化鯤將運(事)元海而負蒼垠然而靖王無祿嚴庭輶訓公孝情真至哀毀逾禮雖縗服  
告終而琴瑟不作既而承賴聖善弛情宦路侍鮑革於西園奉潘軒於東閣蒸蒸不匱僅將一(字)朝廷嘉之不奪  
其志就拜游擊將軍旌厥美也而(風枝)雖醉茹荼(再)無抑冥滅性之規永結終身之痛服闋授右衛交川府右果  
毅都尉尋除右衛親衛府左郎將未幾遷中郎將乘械校左衛將軍  
尋拜左驍衛將軍(巡警平臺)至(巴)司馬之任抑揚(六校)克著聞聲之想(簡錡式)清(御)將之聲(元)穗竹符載剖(道)  
良之寄是歸顯慶二年授使持節普州諸軍事普州刺史宣風玉疊叱馭而越危梁恤隱銅陵坐嘯而濟濱俗戒  
以他事坐爲士伍(尋授播州刺史學計入朝詔復本官原其非罪旋加明威將軍仍統右羽林軍事屬南薰之期  
典北軍之重密勿軒蒸時論禁之有事介邱(丘)親陪臺駕(後)金笞路清鳳蹕於離宮會玉升(壇)肅龍庭於帳殿黃  
承千祀之慶載衍七命之堯(堯)壯武將軍乾封三年遷右衛將軍仍守北門供奉鈞陳効職惠民奉於紫宸劍折  
貽杖凌歸全於元夜以總章二年十二月(丁丑)薨於京師(永安之里第春秋六十有三)喪櫬輶悼乃降詔曰

飾終加等義在於念勞(博)往由恩理存於難處故右衛將軍淄川縣公李孝同地分(技)威望重當福善無憂(滋)風  
整開夷剖(劍)符方鎮仁明之化載彰肅旅中軍爪牙之寄斯允(參)(參)勤蹕於行(廈)(旌)夜盡(燭)舟(舟)貽(災)於座  
玉毫從物化實(寬)愴於(子)懷宣被寵曾式旌幽穸可贈左武衛大將軍使持節都督代忻朔蔚四川諸軍事代州  
刺史(又賜)物一百五十段米粟副焉(喪事所須)命官給仍邊梨園樂人(子)之日持降(口)中使賈錦被及衣一襲  
以送終惟公承累聖之(子)基資樂善之餘慶(子)英秀(子)初晉靖王嘗謂妃曰昔(子)方(子)空(子)親(子)子河(子)以  
其小名錫之(子)始復饑雍早秀先憲伯喈之名桓溫夙敏爰採太異之性(子)比跡傳事固無(意)德(泊子)於成立卓  
馬俊善(直節)風之(誦)超(姿)姿開朗月之華(識)藝(才)實(才)雖(才)踢(蘭)陔地義之範荆庭天倫之愛故能武帳  
升班戎軒歸(德)實(寬)惟肺腑之重委以腹心寄門霜景戰蹟一代之殊榮室漏(教)童百年之(互)所(謂)風(流)不  
蓄(音可)嘵乎零落蹊桃(走)結無言之痛指殘營柳終飭長指之期於(寫)裁(子)哀哉粵以咸亨元年歲次庚午  
五月廿四日歸寢於靖王之舊塋禮也有子朝散大夫行(子)司馬(九子)軍事頃等並幼彭翹楚式光枝鶯銜恤苴  
庭泣英規之永謝延擇柏隧廟與猷之莫紀秉勑豐碑敬揚徵烈其銘曰

天地交舊日月騰光啓聖龍躍育圖鳳翔宇籠千古業契升唐掃清六合功包萬物兆分帝系式振皇綱八族既  
(睦)四維是(乃)張惟孝惟(清)實光(子)屏(如珪如璋)元(天)穆(勤)勳高奇(重)身沒名揚累仁至裕(家)業善積祥美華粹發  
岐嶷先彰毓彩藩閭崇興志(參)峻圖員曰遠概(泛)霜時鍾毀冕道(迫)靈裳(嘉)氏駿鹿頂(暴)儀(五)部(板蕩)九服(四)三  
奇(霧)金(子)効祉玉(子)栖芳(子)跡參披襟髮製留榮承顏不匱就養無方聿歡定省驚革炎涼帝曠純德爰加  
寵章孝實(寔)忠本衆柔距則寫(子)武(帳)鷙戎場(子)郵慢(子)東北軍典委楚(子)夏(子)中(外)續(子)實允誠行期變  
化遠懷殞良趙墳櫛起薛邑汎荒載刊石留永播金相

\* 一の文は『金石萃編』卷五七にも見える。「」内の文字は『金石萃編』に見える文字。( ) 内の文字は『金石萃編』では磨滅したものとされ『全唐文』に保序される文字。」「内の文字は『金石萃編』の文字であってその上の『全唐文』の文字とは異なるもの。

△宋公・5▼

唐陳子昂

爲司農李卿讓本官表

陳子昂集

卷四 (徐鵬校)

一九六〇年三月  
中華書局

(臣某中謝) (云云) 臣竊愚。本無名節。臣身公族。竊軒冕之餘。假翼宗枝。溫衣冠之末。因循寵服。累歷榮班。素凜之實每淺。効拙之勤未補。橫被逆賊徐敬眞以私讐架福誣臣。云與叔孝遜交通逆豎。獄官執法。寘以極刑。臣牒領之誅。已甘灰粉。泉壤之魄。分隔幽冥。不圖天地之恩。再生枯骨。日月之照。曲被幽衆。察臣非辜。憇臣無罪。不棄文法之議。特垂赦宥之慈。蟠蟄微躬。復得全活。自非陛下。克明克聖。至德至仁。臣之魂散。不保今日。臣死爲幸。豈敢期榮。陛下重加寵章。還臣舊職。典司宗伯。以贊周親。處臣胡賴。敢冒朝典。况臣叔孝遜。推使未迴。在於愚臣。更須待罪。安敢私職。以玷國章。伏乞天恩。照臣愚懇。不勝感戴生榮之至云云。

\* ( ) 内の文字を『四部叢刊』に收める『陳伯玉集』に記す。『全唐文』卷二一〇にも同じ文があるが、懇勅を恩制とし、在於愚臣を在於臣愚とし、更須を更深とし、私職の私に「一作訟」と注する。なお、此編「李神通」の一参照。